

## 令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

### 1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。  
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

### 1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)	
			国語	数学	国語	数学
3 年	学校	60	49	40	9.1	12.8
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6

	平均IRTスコア
	理科
学校	448
大阪市	489
全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

### 2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3 年	学校	64	58.9	47.6	48.7	45.1	46.9	7.9	6.0	12.7	10.4	7.3
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
9月2日	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※ 3年生の理科はB問題を選択

## 令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

### 調査結果から

令和7年度 全国学力学習状況調査結果より

国 語

#### 【成果と課題】

大阪府の平均点まであと3点に迫ることができた。基礎知識や語彙力に関してはおおむね定着が見られた。読むことに関する正解率が高かった。文章全体の構成を捉え、筆者の意図を踏まえて自分の考えを表現する問題に課題があった。また、基本的な語句や読み取り問題においても解けない生徒の割合が多くあった。

#### 【今後に向けて】

読書量や言語体験の差が、理解力や表現力の差につながっていると考えられる。今年度から、「読書」の取り組みを行い読解力向上に努めている。「何を書いたらいいかわからない」と最初から諦めて手をつけない生徒もいるので、完璧な解答でなくとも良いこと「一文だけでもよいから書くこと」の練習を積ませている。

数 学

#### 【成果と課題】

平均正答率は40%であり、全国と比べて-8.3ポイントであった。前年度と比べて全国との差は3.2ポイント縮まったが、まだまだ多くの課題が残る結果となっている。特に学習指導要領の領域のうちでは「関数」や「図形」が大きく下回っており、「思考・判断・表現」の観点別正答率が低いことから、知識・技能にとどまらず、それらを活用して論理的に考え、表現する力に課題があると考えられる。

この現状を踏まえ、今後の授業改善においては生徒が自ら問い合わせを立て、多様な方法で探求し、得られた知見を他者と共有する『主体的・対話的で深い学び』を推進していく必要がある。

#### 【今後に向けて】

数学科においては上記の成果と課題を踏まえ、今後以下のような取り組みを実施する。

##### (1) 授業改善

・問題解決型学習の導入: 単元ごとの終末に、関数や図形の知識を応用して現実世界の問題を解決する課題を設定する。生徒が興味を持って取り組める題材を積極的に取り入れる。

・協働学習の促進: グループワークやペアワークを増やし、生徒同士が互いの考えを説明し合い、疑問点を解決する機会を設ける。これにより、自分の思考を言語化する力と、他者の考えを理解する力を養う。

##### (2) 評価方法の改善

・多面的な評価の導入: 定期テストだけでなく、授業内での発表、レポート、グループ活動への貢献度など、多様な側面から生徒の学習状況を評価する。これにより、単なる知識の有無だけでなく、思考力や表現力といった汎用的な能力も公正に評価する。

これらの取り組みを通じて、数学の面白さや実用性を実感させながら、生徒一人ひとりの「思考・判断・表現」の力を確実に伸ばしていくことを目指す。

理 科

#### 【成果と課題】

今年度の結果としては、「大阪府標準偏差127.8ポイント・本校108.5ポイント」という結果であり、大阪府の標準偏差から19.3ポイント下回った結果となった。昨年度、2年次に受験したチャレンジテストの平均点では、大阪府平均から+2.5点であった。今年度の大坂府の標準偏差から19.3ポイント下回ったことをふまえると、1.2年次に学習した内容からの出題のため、範囲が広く、復習不足であると考えられる。今回の設問からでは、学習領域ごとの分析は難しかった。問題形式では、選択式は、無解答率が0%に対し、記述式では、無解答率が31.9%(大阪府13.4%)であり、思考判断表現の観点が苦手な生徒が多いことが分かった。選択式でも、思考判断表現の観点も問題では、正答率が30%以下であった。

#### 【今後に向けて】

全体として、思考判断表現の観点の得点率が著しく低いといえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「考えを表現する力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。暗記するのではなく、実験や観察を通して解答を導くための方法を指導していく。

## 令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

### 調査結果から

令和7年度 3年生チャレンジテスト

#### 【成果と課題】

##### 〈国語〉

大阪府の平均まであと約5点であった。平均点には追い付かなかったが100点から70点以上が3割と健闘した。学習内容を深く理解し、読解・表現の力が身に付いている上位層が育っている結果と考える。しかし、得点の二極化が大きく、思考力を問う問題の平均が特に低かった。

##### 〈社会〉

平均正答率は、大阪府平均の51.2に対して、本校平均は、47.6ポイントで-3.6ポイントであった。特に複数の資料から、情報を読み取り、選択式で答える問い合わせして、-10ポイント以上(最大-20ポイント)大阪府平均を下回った。一方で、沖縄県に関する問題は、修学旅行で沖縄に行き、平和学習をしたこともあり、興味関心が高く、記憶していることも多く正答率は高かった。また地形図に関する問題は、事前に過去のチャレンジテストに出でていた類似する地形図の問題を行つたため、正答率が大阪府平均を上回った。ただ全体的には、やはり、忘却による誤答が多いように思われる。一部で、印象に残る人物に関しての事柄に関しては、記憶している生徒がいることも正答率の比較でうかがえる。

##### 〈数学〉

府平均と比べて平均正答率は-5.2ポイントであった。設問別集計結果を見ると、基礎・基本問題については大阪府の正答率と比べても大きく差ではなく、問題によっては超えるものもあった。しかし、読解力が必要となる応用的な問題になると大阪府の正答率と比べて大きく下回っている。特に証明や説明の問題になるとより大きな差となってしまっている。

##### 〈理科〉

今年度の結果としては、「大阪府平均46.0点、本校45.1点」という結果であり、大阪府の平均点から0.9点下回った結果となった。昨年度、2年次に受験したチャレンジテストの平均点では、大阪市より+2.5点であった。今年度の大坂府平均から-0.9点であったことをふまえると、範囲が広くなり、復習もしたが、課題が残る結果になった。今回の設問では、「粒子領域」「地球領域」で大阪府平均を上回る得点率であった。「粒子領域」では、1,2年次で行った化学実験の復習をした。実験内容のことを中心に行つたため、『再結晶』などの用語は92%の正答率であった。しかし、質量ペーセント濃度の計算や溶解度の計算は1年次から苦手な生徒が多く、溶解度の計算問題の正答率は0%であった。溶解度は簡単な計算で出せる問題だが、「計算をする」というだけで避けてしまう生徒が多いと読み取れる。また、「地球領域」では、実力テストで点数が低かった火山の問題がでたため、実力テスト後に復習を取り入れていた。そのため、無解答率も少なく、短答式や記述式にも50%近くの生徒が正答していた。「エネルギー・生命領域」は大阪府の平均とあまり差がなかった。の中でも、正答率が低かったのはエネルギー領域の計算問題であった。

##### 〈英語〉

府平均と比べて平均正答率は46.9点で府平均-6.3ポイントであったが、昨年度の2年生(-7.5ポイント)を上回った。

3年生では、1学期に数回単語テストを行い、語彙力の定着に力を入れた。また毎回の授業でペアワークを行いながら、単語や短い英文を聞いたり読んだりし、また昨年に引き続き、初見の英文を決まった時間で読んで問題を解くことも繰り返し行つた。(“読むこと”と“聞くこと”)その成果もあってか、4技能(聞く、読む、話す、書く)のうち、“読むこと”と“聞くことは”は府平均に近い成績を出すことができた。(聞くこと-1.8ポイント、読むこと-1.5ポイント) しかしながら“書くこと”は、府平均-3.0ポイントとなり、課題が残った。

#### 【今後に向けて】

##### 〈国語〉

基礎問題での取りこぼしが多い層へのアプローチが必要である。“読めていない”

“文が拾えていない”などの傾向が見られる。今年度から朝学習に「読書」を取り入れているが、国語が苦手な生徒の多くは、ただ文字を追っているだけで読解力の育成には至っていない。具体的な取り組みとして①語句の意味②文中の根拠の拾い方③記述の基本形(主語+述語+理由)などを問うミニ課題を導入し成功体験を積ませたい。小さな達成を積み重ねることで、肯定的な自己認識が育つのではないか。「次も取り組んでみよう」という意欲が、学習習慣の確立にも繋がると期待している。

##### 〈社会〉

社会科において、文章や資料の読み取りを行う授業ができるおらず、講義や映像により資料提示が中心になっている。こちらから教授するだけでなく、文章を読み、自ら文章にまとめる、積極的な学びを展開する必要がある。ただ教示する事柄が多いので、授業中だけでは、そのような情報の読み取りに終始する時間がないので、やはり家庭学習で、生徒自身が積極的に学習する時間を確保し、自発的に学習しなければならない。そのような習慣と態度を養えるようにも、指導しないではいけないと感じる。単純に文章読解力が低いという実態があるので(その反面、コミュニケーション能力(表現力)や運動能力は高い)、幼少期の頃から、文章を読むという落ち着いた環境を作るのも必要不可欠で学校教育だけでは、不可能である。(生徒の話を聞く姿勢態度は、大阪府の中でも上位に入ると思われる)

##### 〈数学〉

今回のチャレンジテストでは、証明問題や説明問題の正答率が低く、論理的に道筋を立てて考えをまとめる力が十分に育っていないことが明らかになった。今後は、授業の中で「なぜそうなるのか」を言葉で表現する活動を増やし、根拠を明確にして説明する習慣を身に付けさせたいと考えている。また、基本的な定義や性質の理解を確実にし、それらを活用して論理を組み立てる練習を段階的に進めることで、証明・説明問題への対応力を高めていく。

##### 〈理科〉

全体として、計算問題の得点率が著しく低いといえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「どの計算方法で導けるかを考える力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。計算問題は特に暗記するだけでは解けない。そのため、どの分野でどの公式を使用するか、問題文をどのように読み解くかを、プリントや問題集を宿題で出すだけでなく、授業内で解説する時間を確保し、指導していく。

##### 〈英語〉

“読むこと”、“聞くこと”については、継続して音読指導とリスニングの練習などに力を入れる。また、”読むこと”については、多くの初見の英文に触れさせ、短時間で読めるように繰り返し練習する。また来年度も語彙力を高めるために単語テストを行い、定着させる必要がある。“書くこと”についても、今後は学習した語句の復習を帶活動で行う、多くの語句を使って英語を書かせるなどして改善を図る。さらにまとった文を書く練習を各单元後に行うことで定着させる。

また、“読むこと”と“書くこと”や、“聞くこと”と“書くこと”などを統合的かつ複合的に行う活動を積極的に行い、生徒の書く力を向上させる。次年度は、府平均を超えることをめざす。

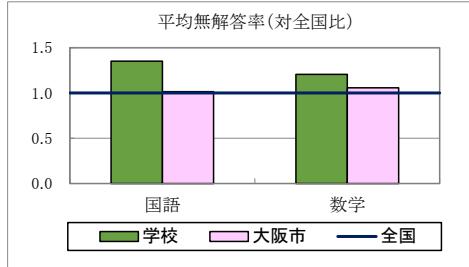
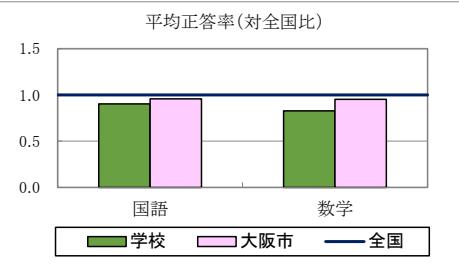
**令和7年度 東生野中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—**

**全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より**

**【全 体】**

	平均正答率(%)	
	国語	数学
学校	49	40
大阪市	52	46
全国	54.3	48.3

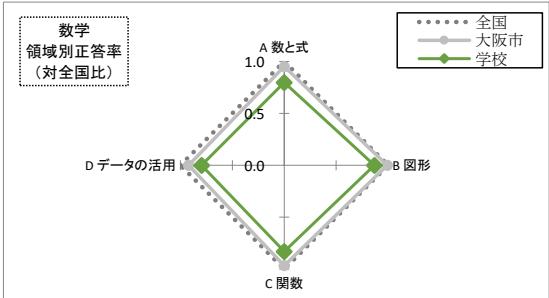
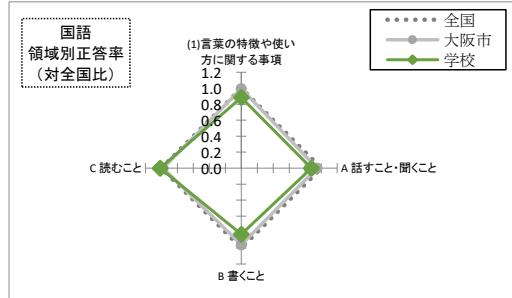
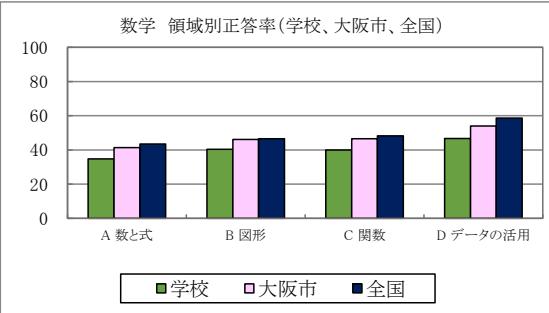
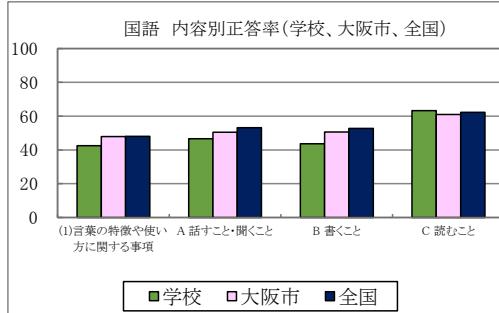
平均無解答率(%)	
国語	数学
9.1	12.8
6.8	11.2
6.7	10.6



**【国 語】**

学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方にに関する事項	2	42.5	47.9	48.1
(2)情報の扱い方にに関する事項	0			
(3)我が国の言語文化に関する事項	0			
A 話すこと・聞くこと	4	46.7	50.4	53.2
B 書くこと	5	43.7	50.6	52.8
C 読むこと	3	63.3	61.0	62.3

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	34.7	41.4	43.5
B 図形	4	40.4	46.1	46.5
C 関数	3	40.0	46.6	48.2
D データの活用	3	46.7	54.0	58.6

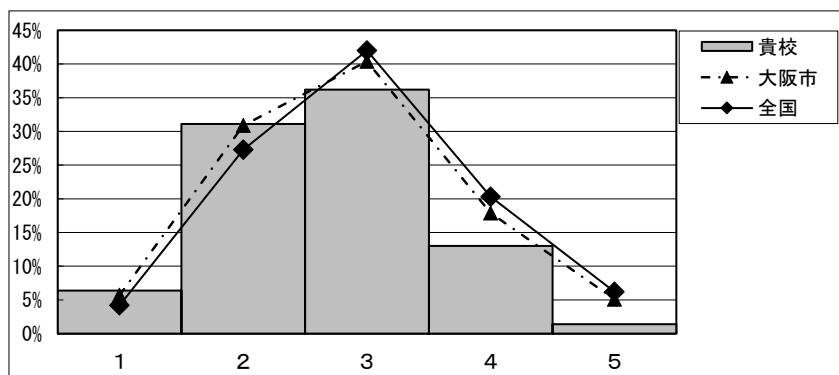
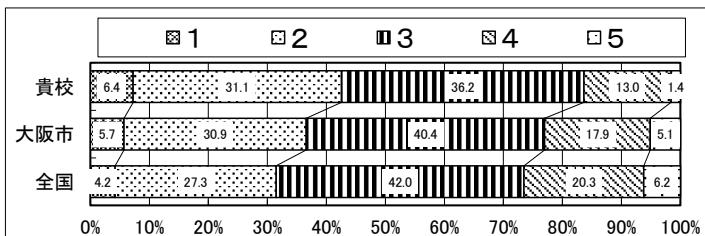


令和7年度 東生野中学校のあゆみ  
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【理 科】

	平均IRTスコア
学校	448
大阪市	489
全国	503



# 令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

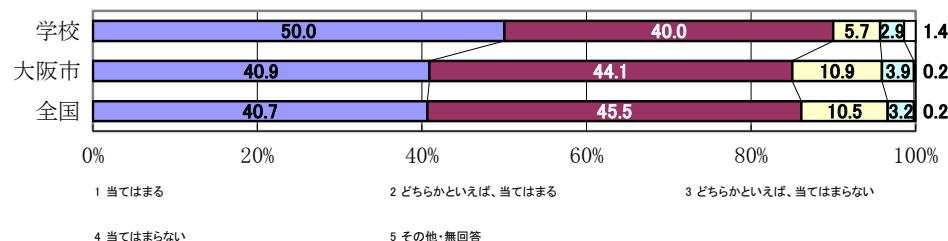
## 生徒質問より

■1 ■2 □3 □4 □5 ■6 ■7 ■8

質問番号
質問事項

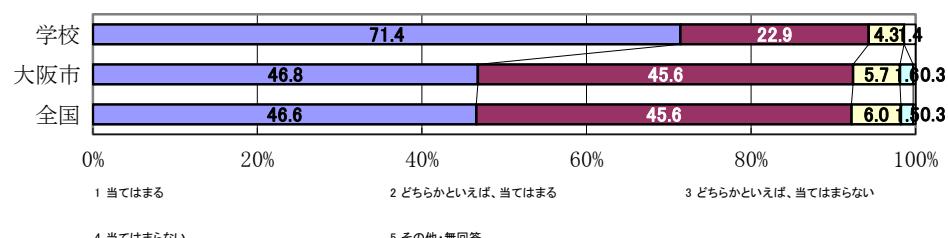
5

自分には、よいところがあると思いますか



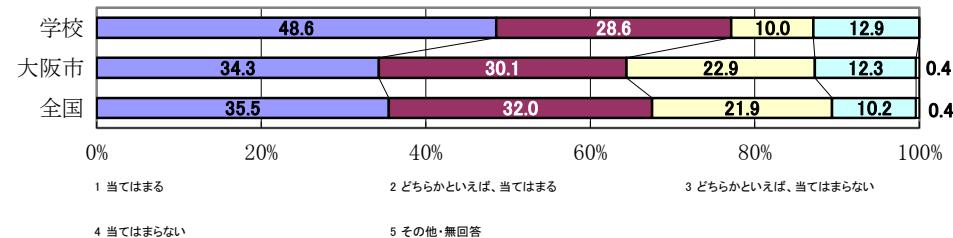
6

先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか



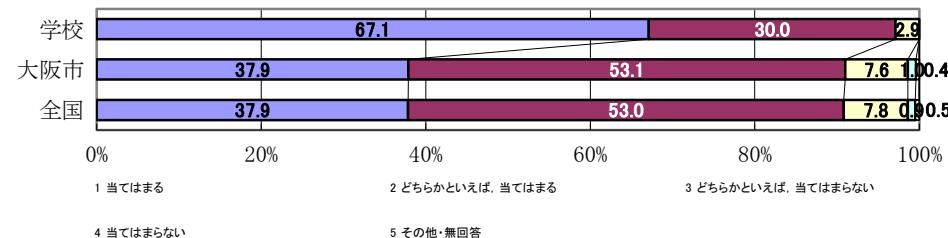
7

将来の夢や目標を持っていますか



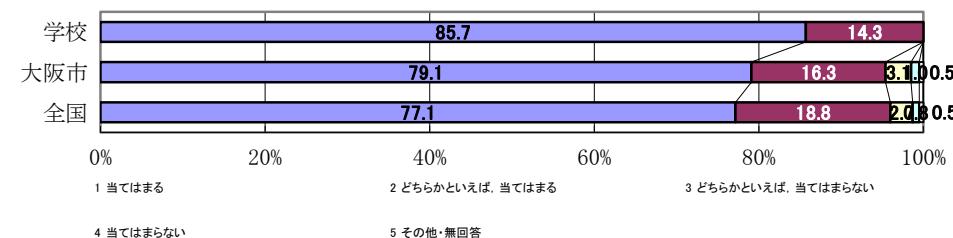
8

人が困っているときは、進んで助けていますか



9

いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか



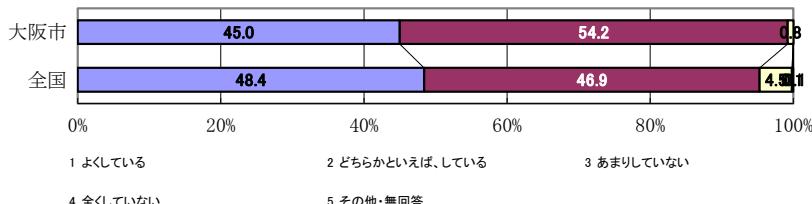
# 令和7年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

## 学校質問より

□1 ■2 □3 □4 □5 ■6 ■7 ■8 ■9 ■10

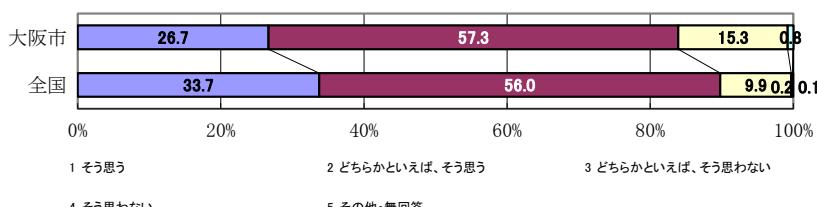
質問番号
質問事項
18
授業研究や事例研究等、実践的な研修を行っていますか

### 学校 「よくしている」を選択



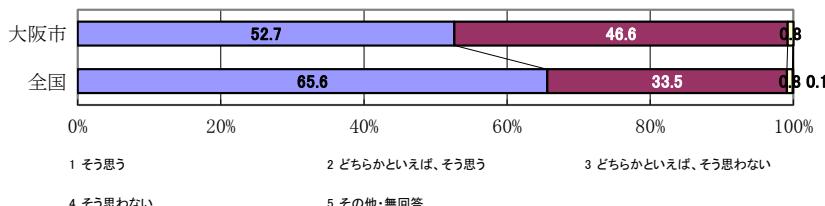
22
今までの取組をそのまま踏襲するのではなく、新しい取組を導入したり、提案をしたりしていく教職員が多いと思いますか

### 学校 「そう思う」を選択



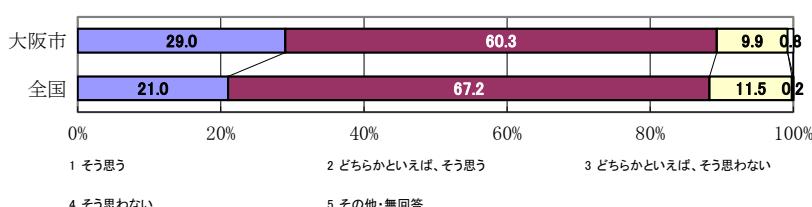
23
教職員が困っているとき、管理職と教職員との間で随時相談できるなど組織的に対応する体制を構築していると思いますか

### 学校 「そう思う」を選択



25
調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

### 学校 「そう思う」を選択



57
コンピュータなどのICT機器の活用に関して、学校内外において十分に必要なサポートが受けられていますか

### 学校 「どちらかといえば、そう思う」を選択

